

# 民話の森の歩きかた

—眠れる森の美女・シンデレラ・赤頭巾・青ひげ・長靴をはいた猫—



はじめに

## 1 民話とはなにか

民話は、英語ではフォークテイル（民衆の話）、ドイツ語ではフォルクスメルヘン（民衆のメルヘン）、フランス語ではコント・ポピュレール（民衆のコント）といわれるように、ごく普通の人々のあいだに語り継がれた話であり、おそらく人類の発生とともに始まるきわめて古い歴史を持っている。これは、緑の木々が世界中のいたるところに根をおろし、枝をはり、時には人を寄せつけぬほど深い森となるのとよく似ている。

しかし、私たちがこの民話の森に分け入り「民話とはなにか」を考えはじめたのは、それほど古いことではなく、十九世紀初頭ドイツのグリム兄弟とともに始まるといってよいと思う。隣国フランスの革命とその余波につよい衝撃を受けたヤーコプとヴィルヘルムの二人は、民話を失われたゲルマン民族の神話の断片と考えて、砕け散った宝石のかけらを拾い集めるように一つひとつ大切に話を記録していった。

こうして出来上がった『グリム童話集』は、一八一二年の初版から一八五七年の第七版に至るまでの四十五年ほどの間に次第に豊かになってゆくが、同時に二人の民話に対する理解も広く深くなってゆく。故郷のカッセルで集め始めたごく身近な話が、実はドイツやゲルマン民族の枠を越えインド・ヨーロッパ世界全体に広がることを理解し始めたのである。

グリム兄弟のこのような考えは、インド学の研究者であるマックス・ミュラーやテオドル・ベンファイに受け継がれる。ドイツ生まれのミュラーは、若くしてイギリスに渡り、一八五六年に『比較神話学試論』を著す。彼はこの大著の中で、民話をアーリア民族の太陽や空や闇や嵐を中心とした神話体系に結びつけて解釈し、当時の人々に自然神話学派として幅広い支持を得た。



1855年にエリザベート・パウマンによって描かれたて、ヴィルヘルム（左）とヤーコプ（右）の当像

一方ベンファイは、ミュラーよりもすこし年上だったが、一八五九年にインドの説話集『パンチャタントラ』のドイツ語訳を出版する。ベンファイは、その序文の中で当時ヨーロッパで知られた民話の大部分の話が、書物を通じてインドから伝えられたものだと主張した。この立場はインド起源説と呼ばれ、やはり広い支持を得た。

この二人の考えは、あまりにヨーロッパ中心であり、しかも文献に偏り過ぎていたから、今日ではこれをそのまま信じる人はもういない。しかし最初に激しくしかも徹底的にこれを批判したのは、イギリスのアンドルー・ラングである。ラングは『世界童話集』などによって日本でもよく知られる人類学者であり、作家である。彼は、ミュラーと同じく神話の研究から出発したが、文献のみにとらわれず広く未開社会の口伝えの話に目を向けた。そして、インド・ヨーロッパだけではなく、アジア、アフリカ、アメリカを含めた世界中のありとあらゆる民族の話に共通の構成要素（モチーフ）が存在することに気がついた。このことから彼は「世界中の人間は、その文明の程度にかかわらず、かつては必ず未開社会を経験している。民話や神話のモチーフは、その未開時代の人類の思考の記憶であるから普遍的なのだ」と結論した。このラングの立場をそのまま支持する人も、今ではもういない。しかし民話研究の視野を世界に広げたラングの功績は、忘れることは出来ない。

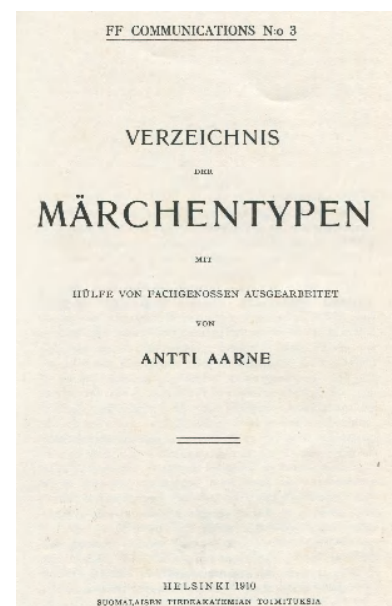
十九世紀の後半はまた、ロシアのアファナーシエフ、フランスのセビオー、コスカン、イタリアのピトレー、ノルウェーのアスビョルセンとモーなどが活躍し、各国にすぐれた民話集の生まれた時代でもある。

## 2 二十世紀以降の民話研究

十九世紀の民話研究が、初期の神話学や人類学に結びついて民話そのものの発生や起源を問うという壮大なスケールのものであったのにたいして、二十世紀に入ると研究はより肌理の細かいものになってゆく。そこにはさまざまな考え方があるが、現在よく知られている研究の流れを整理してみると、国際比較、構造論、精神分析、文芸学という四つがあるといつてよい。そこで、つぎにこの四つのアプローチを簡単に紹介してみよう。

### 2-1 話型の国際比較研究

十九世紀の後半に世界各国のすぐれた民話集が出そろい、「しっぽの釣り」や「シンデレラ」のようなよく似た話が世界中で広く語られていることが分かってくると、「民話が、どこでいつ生まれたか」という発生についての関心は相変わらずだが、対象が個々の話に移り、それぞれの話に関する国際的な比較が始まった。その中でまず忘れられないのが、フィンランドのアンチ・アアルネの仕事である。



FFC 3号『民話の型目録』の扉

世界中の民話を比較し研究するためには、あるタイプの話をも他の話から区別する「分類」がしっかりしていなければいけない。そこでアアルネは、話の構成要素であるモチーフとその配列がよく似た類話を集めて「話型」というグループを作り、さらにその話型を整理して分類カタログを作成した。これが有名な『民話の型目録』である。アアルネのこの仕事は、のちにアメリカのステイス・トンプソンによって補われ、話型には、二人の頭文字であるATのナンバーが打たれることになった。現在ATのカタログには、全部で二千五百の話型が用意され、それがさらに動物民話（一番から三〇〇番）、本格民話（三〇一番から一一九九番）、笑話（一二〇〇番から一九九九番）、形式譚（二〇〇〇番から二三九九番）、分類できない話（二四〇〇番から二五〇〇番）の四つに下位分類されているが、もちろんこれでは足りない。そこで各国の研究者は、アアルネとトンプソンの考えを尊重しながら、それぞれ自分の国のカタログを作ることになる。なかでも日本の関敬吾、フランスのポール・ドラリュ、ロシアのアンドレーエフ、朝鮮の崔仁鶴などの仕事はすぐれたものである。（

ステイス・トンプソンは、話型のカタログのほかに六巻からなる大部の『民間文芸モチーフ索引』を完成し、さらに『民間説話』という分かりやすい民話研究の手引きを書いている。また国際的な話型研究の代表としては、たとえばマリアン・コックスやアンナ=ブリギッタ・ルースの「シンデレラ」研究があるが、それに関しては第二章の「世界のシンデレラ」の項で紹介する。

## 2-2 民話の構造研究

民話の構造研究は、一九二八年に当時ソヴィエトであったロシアの民話研究者ウラジミール・プロップの著した『民話の形態学』に始まるといってよい。プロップは、この本の中でまず「機能」という概念を提起した。彼が「機能」と呼ぶのは、登場人物の行為のことで、これが話の基本的な構成要素となる。そして、「機能は話の筋の展開の上でその行為の果たす意味によって決定される」と主張する。

たとえばここに「王女が、イワンに指輪を与える。指輪から現れた若者たちが、イワンを別の王国に連れていく」というエピソードと、「老人が、スチェンコに馬を与える。馬は、スチェンコを別の王国に連れて行く」という二つのエピソードがあったとしよう。そこには話によって「変化するもの」と、「変化しないもの」という、二つの要素が現れる。

主人公の「イワン」「スチェンコ」と言う名前や、主人公に指輪や馬という魔法の品を与える「王女」「老人」という属性は変化するが、彼らの「援助者が、主人公に魔法の品を与え、魔法の品が主人公を別な世界に連れて行く」という行為の意味は変わらない。

この不変の構成要素（登場人物の行為）が機能と呼ばれるものである。そしてこの機能の数はきわめて限られているので、民話の中でもっとも複雑な構造を持つと考えられる魔法民話にもわずか三十一の機能しか現れない。その上この機能は原則として同一の順序で展開されるので、魔法民話は実はたった一つの構造から出来ているということになる。

プロップのこうした大胆な試みは、長い間世界の民話研究者にあまり知られることはなかった。しかし一九五八年にアメリカで英語訳が出版されると大きな反響を呼び、たちまち民話学の枠を越えて人類学や文学の研究に大きな影響を与えることになった。そしてヨーロッパ中心の魔法民話の分析だけにとどまらず、アメリカのアラン・ダンダスやフランスのドゥニーズ・ポールムのように、プロップの方法に改良をくわえ、アメリカ・インディアンやブラック・アフリカの民話の構造を記述する研究者も現れた。彼らは、この方法を用いることによってそれまでまったく「形式を欠く、野蛮な話」とされていた未開社会の民話にもしっかりとした構造があることを示したのである。

しかしプロップは、その生涯を民話の構造研究にのみ捧げたわけではない。彼は、このほかにも『魔法昔話の起源』や『ロシア昔話』といったすぐれた著作を残した。これらの仕事の中で、彼は民話を具体的な語りの方に送り返し、民話と歴史や民族の関わりを考えている。プロップのメリットは、このように歴史と構造を同時に追求したところにあるのだが、世界的に見てもまだこの点は十分に理解されているとは言えない。これは、民話の構造研究の今後の課題の一つである。

そしてさらに民話の構造を考えるうえで忘れてはいけないのは、人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースの仕事である。彼の神話分析の方法は、民話研究の上にも大きな影響を与えた。ことに彼の専門とする未開社会の神話は、民話と境を接して区別することは困難な領域である。その意味でも彼の方法の批判的継承者である日本の山口昌男の仕事（たとえば『アフリカの神話的世界』）は、きわめて刺激的である。またダンダスのすぐれた紹介者である池上嘉彦も『ことばの詩学』で、民話がなぞなぞやわらべ唄と同じ構造の枠組みで捉えられることを見事に証明している。

プロップの構造研究の実際に関しては、第三章「ペローとグリムの赤ずきん」で紹介する。そして第六章「長靴をはいた猫の政治学」では、こうした構造研究のひとつの発展形態を示すことにする。

### 2-3 民話の精神分析

民話の国際比較や構造論は、主として「民話がいづ、どこで生まれ、どんな仕掛けや形式を持っているのか」に答えるものだが、「民話はどんな意味を持っているのか。人々はなぜ民話を語ったり、聞いたりするのか」を考えるうえで、精神分析的な研究は大いに役に立つ。

よく知られている通り、精神分析学にはフロイト派とユング派の二つの大きな流れがある。彼らはともに人間の意識の領域に働きかける無意識の働きを重視するが、フロイト派の人々が無意識をあくまで個人の領域にとどめようとするのに対して、ユング派の人々はそれを人類に通底するものとする。

民話に関するフロイト派の仕事は、フロイト自身の「症例狼男」や「小箱選びの三つのモチーフ」やオットー・ランクの「英雄誕生の神話」といったごく一部しか日本には紹介



されていないが、ほかにもフランツ・リクリンやゲザ・ローハイムの重要な研究がある。

フロイト派に比べてユング派の仕事は、日本では大変よく知られている。これは、河合隼雄を中心とした日本のユング研究者のおかげである。ことに河合隼雄は、ユングやその後継者であるM-L・フォン・フランツやE. ノイマンの考えを紹介するだけでなく、自らも『昔話の深層』や『昔話と日本人』のようなすぐれた民話研究を著した。

ユング派が民話研究の領域で広く受け入れられたもう一つの理由は、彼らが民話そのものを深く研究したことにもある。従来、民話研究者が精神分析学に対して抱いていたもっとも大きな不満は、「彼らは、民話のことを何も知らずに勝手なことをいう」というものだった。たしかに「赤頭巾」にペローとグリムの二つの類話があることすら知らずに、赤頭巾の「赤」の意味とか、狼の「呑み込み」の意味についてばかり語るのは困る。ユング派の人々はフロイト派に比べて、話そのものをよく理解し、話を自分たちの理論の犠牲にすることが少なかったといえる。

しかし、それまでの民話研究を十分に踏まえ、民話とは何かをよく理解していたという意味で、もっとも注目に値するのはブルーノ・ベテルハイムの仕事ではないだろうか。

ベテルハイムは、理論的にはフロイトやメラニー・クラインの影響下にあるが、なによりもまず自閉症の専門家であり、子どもの精神分析に強い関心を抱いている。彼の『昔話の魔力』は「子どもがなぜ民話を聞きたがるのか」「なぜ母親が、一番よい語り手なのか」といった基本的な疑問から出発して、話を一つひとつ丁寧に検討してゆく。もちろん民話は、本来、子どものためだけのものではない。また語り手にも、母親だけではなくいろいろなタイプの人たちがいる。しかし現在の核家族化した家庭環境の中で民話を考えるときには、こうした視点は欠くことができない。

民話の精神分析、とくにブルーノ・ベテルハイムの仕事に関しては、第四章「民話の精神分析」の項で紹介する。第五章「青ひげとジル・ド・レ」では、青ひげの残酷な妻殺しを、エディプス的な悪夢として読み解く立場にも触れることとする。

#### 2-4 民話の文芸学的な研究

口伝の文芸としての民話は、他には見られない独自の様式を備えている。たとえば話の語り初めと終わりの文句がきちんと決められていたり、三人兄弟譚のように同じ場面が三度正確に繰り返されたりするような形式的な約束は世界中に見られる。また話の展開の上でも、殺された主人公が生き返ったり、切られた首がつながったり、非現実的な不思議が容認されていることも一般である。こうした民話の持つ文芸としての特徴の研究は、二十世紀の初頭からデンマークのA. オルリク、オランダのA. ヨレス、ドイツのF. フォン・デア・ライエン等によって進められてきた。なかでもライエンの『昔話』は、山室静によって日本にも紹介され格好の入門書となっている。

しかし現在この領域で、もっとも示唆に富む刺激的な成果をあげたのはスイスのマックス・リュティであろう。彼は、一次元性、平面性、孤立性といった独自の言葉で、民話の

様式を見事に表現した。リュティの業績は小沢俊夫、野村滋などによって精力的に紹介されてきた。ことに小沢俊夫は、『世界の民話』や『昔話とはなにか』に見られるように、リュティの理論を基礎として日本の民話の独自性の解明に努めている。

民話の文芸学的な研究、とくにマックス・リュティの仕事の一端は、第七章「つごうのよすぎるいばら姫」の項で、紹介しよう。

以上のように、本書はこれまで展開されてきた、いくつかの民話の研究を踏まえて「民話とはなにか」を考えることを目的としている。そこに登場するのは「シンデレラ」「赤ずきん」「眠れる森の美女」「ヘンゼルとグレーテル」「青ひげ」「長靴をはいた猫」というよく知られたお話である。そして、「ヘンゼルとグレーテル」をのぞけば、これらの話のすべてを現在もよく知られるかたちで私達に残してくれたのは、シャルル・ペローである。彼はルイ十四世に仕えたヴェルサイユの宮廷人だが、彼ほどないがしろにされ続けた作家はいないだろう。

そこでまずペローの生きた時代と語りの状況について考えることから始めよう。

以上が、全体の構成をしめした〈はじめに〉の部分です。

つぎに、目次を紹介します。

## 目次

### はじめに 民話の森の歩きかた

- 2 民話とはなにか
- 2 20世紀以降の民話研究

### I シャルル・ペローとヴェルサイユの民話

- 1 『ペロー昔話集』の登場
- 2 宮廷文化と妖精物語の流行
- 3 ブルジョワジーと子どもの教育
- 4 民衆文化と語りの世界
- 5 世界の民話「ロバの皮」

### II 世界の民話「シンデレラ」

- 1 マリアン・コックスと345の「シンデレラ」
- 2 アアルネとトンプソンの「話型カタログ」
- 3 南方熊楠の「西暦九世紀の支那書に載たるシンダレラ物語」

- 4 なぜ、世界の「シンデレラ」なのか？

### III ペローとグリムの赤ずきん——民話の構造研究——

- 1 プロップの方法
- 2 「赤ずきん」の形態学
- 3 民話の地理・歴史学
- 4 夢と象徴言語

### IV 「赤ずきん」と「ヘンゼルとグレーテル」

- 1 もうひとつの民話の精神分析
- 2 「ヘンゼルとグレーテル」と口唇期の克服
- 3 「赤ずきん」とエディプス・コンプレクス
- 4 ベテルハイムの「ペロー」批判
- 5 民話の構造と心の構造
- 6 三人兄弟の冒険

### V 青ひげとジル・ド・レ

- 1 「青ひげ」は民話か？
- 2 ジル・ド・レと青ひげ
- 3 始源への回帰
- 4 残された問題

### VI 「長靴をはいた猫」の政治学

- 1 物語の構造と歴史
- 2 猫と狐
- 3 「長靴をはいた猫」を読む
- 4 王権神話の構造

### VII つごうのよすぎる「いばら姫」

- 1 語り始めと語り納め、そして相槌
- 2 マックス・リュティの仕事
- 3 つごうのよすぎる「いばら姫」